

聖書：マルコの福音書 7：31～37

説教題：エパタ

日時：2025 年 11 月 9 日（朝拝）

「イエスは再びツロの地方を去り」と今日の箇所は始まります。その後、どんな地域を通られたのかが書かれています。まず向かったのはシドン。これはツロよりさらに北方の地域です。そこを通過して次にデカポリス地方へ行ったとあります。デカポリスはガリラヤ湖の南東に広がる地域です。ですから大きく逆戻りしたように見えます。そして最終的にガリラヤ湖に来られました。なぜこのようなルートをたどられたのか、特になぜシドンまで行って、そこから逆戻りしたのか、その詳しい理由は分かりません。前回見た 7 章 24 節に「だれにも知られたくないと思っておられた」とありましたから、そういう環境を求めて一旦ガリラヤから遠い地へと出て行かれてのかもしれませんが。そしてある程度の期を経て、再びガリラヤ湖へ戻って来られた。欄外の別訳には「ガリラヤ湖に来て、デカポリス地方に入られた」と記されています。デカポリス地方はガリラヤ湖に接しているため、その辺りに来られたのでしょう。この地方には主に異邦人が住んでいましたが、ユダヤ人も相当数いたようです。従って今日の箇所に登場する人は異邦人だったのかユダヤ人だったのか、書かれた情報からだけでははっきりとは分かりません。

さてそこに来られたイエス様のもとへ人々が一人の病人を連れて来ました。それは耳が聞こえず口のきけない人でした。彼は後に癒されて話せるようになりますが、話すことができたということは、以前は耳が聞こえていたということを示しています。聞こえていた時期に言葉とその発音を学んでいたのでしょう。また口についても 35 節に「舌のもつれが解け」とあります。とすると彼は口から音は出せても、もつれてしまい、自由に話すことができない状態だったと考えられます。その彼を、人々は「この人の上に手を置いてください」と言って連れて来ました。さてイエス様はこれにどのように対応されたのでしょうか。

33 節でイエス様は、その人だけを群集の中から連れ出します。彼の癒やしを見世物にしないためです。イエス様は彼一人を大切に、個人的に向き合ってみわぎをなさろうとされました。そしてご自分の指を彼の両耳に入れ、それから唾を付けてその舌にさわられました。もちろんイエス様にとっては、そのような行動をしなくても、お言葉一つで瞬時に癒やすことができたでしょう。ですから、これは癒やしのために必要な儀式だったのではなく、むしろ相手のために行われた行動だったと言えます。まず彼の両耳に指を差し込むことによって「あなたの耳にこれからみわぎを行いますよ～」と示し、さらに彼の舌にさわることによって「あなたの口にもみわぎを行いますよ～」と示された。そしてイエス様は天を見上げられました。これは祈りの姿勢です。イエス様はこうして、これから行うみわぎが天の神の恵みによることを示されました。こうして彼の内に信仰と期待を起こそうとされたと考えられます。いつの間にか癒やされたというのではなく、これは神の恵みによることであると理解できるようにされたと考えられます。

そしてその際、イエス様は「深く息をした」とあります。第3版までは「深く嘆息して」と訳されていました。これと同じ言葉はローマ人への手紙 8 章に出て来ます。そこでは「うめく」と訳されています。8 章 22 節で被造物が「うめいている」とあり、次の 23 節では、私たちも自分のからだが贖われることを待ち望みながら、心の中で「うめいている」と書かれています。そして特に関係が深いのが 26 節に「御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださる」とあることです。つまり御霊が弱い私たちを助ける方として、ともにうめきながらとりなしてくださるように、そのようにイエス様もここでしてくださったということです。イエス様は神の力で、ただ簡単に癒やされたのではないのです。イエス様は連れて来られた人を大切にされ、彼に分かるような仕方でみわざを行おうとされました。そしてさらに、ともにうめき、彼の苦しみと痛みをご自分の苦しみ・痛みとされました。そこまでご自分を同一化されたのです。そうした上で「エパタ！」と言われました。すなわち「開け！」という意味です。これは単に詰まっていた耳が開くように！というだけの意味ではなかったでしょう。これは「解き放たれよ！」という言葉です。つまり縛られていた状態から解放されよ！彼の上に臨み、彼を支配していた力から解き放たれるように！そのように彼の人格全体に向かって語られた言葉だったと思われます。するとすぐに彼の耳が開き、舌のもつれが解け、はっきりと話せるようになりました。耳と口の両方が同時に、一気に癒やされるという出来事が起こったのです。

イエス様はこのことをだれにも言ってはならないと人々に命じられました。これまでもたびたび見られたことです。しかし、人々は口止めされればされるほど、かえってますます言い広めました。そしてその人々が非常に驚いて言った言葉で、この記事は締め括られています。「この方のなさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない人たちを聞こえるようにし、口のきけない人たちを話せるようにされた。」

さて、この箇所は私たちに何を語っているのでしょうか。ここから三つのことを学ぶことができると思います。第一に憐み深いイエス様のお姿です。イエス様は人々の前でショーをやるような仕方で癒やしを行われたのではなく、彼を群集の中から連れ出し、一人の人間として向き合われました。そして、彼に合わせ、彼が理解できるような仕方で、一つ一つの動作をされました。そのようにイエス様は彼の世界の中に入って来てくださったのです。そして彼とご自分を同一化させるあまり、ともにうめいてくださいました。ここに「受肉」の原理そのものがあります。イエス様は私たちのただ中に来てくださいました。そして私たちの重荷をともに担い、うめきながら背負ってくださいました。このお姿が指し示すのはやがての十字架です。本来うめく必要などない方、私たちから遠く離れてご自身の完全な喜びの中にだけいれば良いお方が、苦しみと悩みのただ中にある私たちのところまで来てくださり、ご自身と私たちを一つに結び付けてくださった。そしてうめきをもって、ご自身が犠牲を払うことも厭わずに進んでくださり、私たちを救い出してくださる。そのようなイエス様のお姿をここに見るのです。

第二に学ぶのは、ここにはメシアがもたらす素晴らしい祝福が描かれているということです。何と言っても今日の箇所を中心メッセージは、旧約聖書で約束されていた救いの祝福が、このイエス様において成就し始めているということです。今日の箇所では耳が聞こえず口のきけない人が癒やされました。これはイザヤ書 35 章が語っていた祝福そのものです。メシアの時代にこのような祝福が臨むとして、次のように言われていました。イザヤ書 35 章 5～6 節：「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。」 イエス様がその人に手を置いた結果、今日の箇所の 35 節に「すぐに彼の耳が開き、舌のもつれが解け、はっきりと話せるようになった」と書いてありました。そしてそれだけでなく、それを見た人々が非常に驚いて語った次の言葉が最後に記されることによって一層そのことが強調されています。「耳の聞こえない人たちを聞こえるようにし、口のきけない人たちを話せるようにされた。」 これを語った人々がイザヤ書 35 章の言葉を念頭に置いていたかどうかは定かではありません。もし彼らが異邦人であったなら、その可能性は低いでしょう。しかしこうした彼らの言葉を用いながら、マルコはあのイザヤ書の預言が、まさにこのイエス様において成就している！ということ伝えようとしたのだと考えられます。約束されたメシアによる救いの時代が、ついにここに到来し始めた！と。

そしてもう一つここには旧約聖書の言葉を反映した言葉があると言われます。それは 37 節の人々の最初の言葉、「この方のなさったことは、みなすばらしい」という言葉です。これは何を思い起こさせるでしょうか。それは創世記 1 章 31 節で神が天地創造をなさった時、それらを見て「見よ、それは非常に良かった」と言われている御言葉です。もしそうだとすると創造本来の状態への回復というメッセージが一層強調されることになります。神が造られたこの世界と人間の状態は本来素晴らしいものでしたが、人間の罪によって、その栄光ある状態は大いに失われました。そしてこの世界には苦しみと嘆きが入り、そこはカオス、混乱が満ちるところとなりました。けれどもイエス様はイザヤ書が語ったと通り、「耳の聞こえない者の耳は開けられ、口のきけない者の舌は喜び歌う」ようにしてくださる方です。そうして創造本来の素晴らしい状態を回復してくださる方です。そのようなお方として私たちの世界に來られたということです。

そして第三に考えたいことは、イエス様がこの出来事を「だれにも言ってはならない」と命じられた意味についてです。これはこれまでも見て来たことですが、一言で言えば、誤ったメシア観が人々の間で広まらないためです。間違った期待で勝手に盛り上がってしまい、それが逆にイエス様に対して正しい信仰を持つことの妨げとならないようにするためです。もしこの出来事を表面的にみれば、人々は熱狂するでしょう。「この方は奇跡を行う方だ！病気を癒やし、悩みをみな取り除いてくださる方だ！」と。そしてそういう意味の救いをイエス様に求めるようになります。しかしそれではイエス様がこの世に來た目的の本質を捉えられなくなってしまいます。ですからイエス様はこの時点では、まだこのことを人々に言ってはならない！と言われたのです。言い換えれば、この出来事は後の十字架と復活を経てこそ正しく理解されるということ

とです。その光の下でこそ、この出来事の真の意味が明らかになるのです。

神から見て非常に良かったと言われたこの世界から、その素晴らしさが失われたのは、先にも触れたように、人間の罪ゆえです。罪によって世界に呪いが入り、以来、人間は罪とサタンに縛られ、非人間的な状況に置かれています。そのような私たちのところに神の御子なるイエス様が人となって来てくださり、私たちの罪を身代わりに背負って十字架上で死に、その贖いを完全に成し遂げた方として三日目に死より復活されました。その勝利の力をもって、エパタ！解放されよ！と語り、私たちを縛る力から私たちを解放してくださるのです。そして神が本来意図し、ご計画くださった素晴らしい祝福への回復を導いてくださるのです。

そのメシアによる祝福がイエス様によって始まっている！というのが今日の箇所
の出来事の意義です。確かに神の御心が完全に実現する御国は、なお将来のことです。それはイエス様が再び地上に来られる再臨の日、そして新しい天と新しい地が現れる日に起こります。けれども約束の救い主が地上に来られたことによってメシアの祝福はすでに始まっているのです。今日の箇所はその確かなしるしであり、またデモンストレーションです。このことを私たちはイエス様の十字架と復活の光の下で見る時、今日の箇所から知ることができるのです。ですから今日この箇所を読む時も、ただこの箇所を見つめているだけでは真の意味が分からないということになります。イエス様の十字架と復活を信じないと、ここをただ奇跡物語として読み、今日もこんなことは起きるのか？そんなことはあり得るのだろうか？と考え込んだり、あるいはイエス様をただ奇跡を行う人として見て、そのような観点から頼る人になってしまいかねません。しかし十字架と復活の光の下で見る時、これははるかに大きなメッセージを私たちに伝えていることが分かるのです。

私たちもかつては罪の呪いとサタンの支配下にあった者たちです。その力に捕らわれ、様々な苦しみの中にありました。しかしそこから私たちを解放してくださる真の救い主がおられます。その方は今日も「エパタ！」「開かれよ！」との言葉をもって、私たちを囚われの状態から自由にし、神との交わりへ導き、私たちを本来の輝かしい、素晴らしい状態へと回復させてくださいます。私たちはその救いの一部をすでにこの世で「御国の前味」として、色々な仕方で味わいます。しかし、それがすべてではありません。より偉大な日はこれから来るのです。イザヤ書 35 章はその日のことを告げています。先にイザヤ書 35 章 5～6 節を参照しましたが、その結びとなる 10 節にこうあります。「主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭にはとこしえの喜びを戴く。楽しみと喜びがついて来て、悲しみと嘆きは逃げ去る。」 この御言葉が究極的に実現する日が来ます！小羊なる主イエスに贖われた者たちは、喜びながらまことのシオン、新しいエルサレムに入ることになります。永遠の喜びがその頭にあるようになります。そして私たちはまさに「楽しみと喜びを得る者」とされ、「悲しみと嘆きとは逃げ去って」行きます。このような日が来ることを楽しみに前に見つめながら、私たちをあらゆる呪いから解放し、神が備えてくださった素晴らしい自由と救いの祝福へ導いてくださるイエス様に従って行く者たちで

ありたいと願います。